

明治維新前の土佐の精神的風土と女性（その5）

柴田 静意

目次

九 南学の隆盛期より幕末にかけての文教の流れ

- (1) はじめに
- (2) 小倉三省
- (3) 野中兼山
 - イ 兼山と文教
 - ロ 郷士の起用と殖産
 - ハ 兼山の遺族
- (4) あとがき

九 南学の隆盛期より幕末にかけての文教の流れ

(1) はじめに

わが国の儒学は主として儒林において半禅半儒の形で存在していた。久しく続いた戦乱も収まり徳川時代となると、林羅山は家康から儒官に任ぜられ、それ以来朱子学の隆盛をみた。土佐においては僧侶であった谷時中がそれまでの儒学から脱却するため、勇断をもって還俗し、禅味を帯びない儒門を確立した。そしてその門下から小倉三省、野中兼山、山崎闇斎等多数の英俊が輩出した。これらの人々のそれぞれの活躍は顕著で、広く遠く後世にまで影響を与えた。時中より兼山の失脚までの約五十年は土佐における海南朱子学の一番華やかな最盛期であり、その端緒をなしたのが小倉三省であったと言えるかもしれない。

(2) 小倉三省

小倉三省は名を克、字を政實、通称を彌右衛門、号を三省と称した。慶長九年の生まれで谷時中より六才若く、野中兼山より十一才長じていた。三省のひととなりを知るためには父小倉少助政平について語らねばならない。

少助は山内一豊に従い数々の戦功をたてたので、一豊は藩主として土佐に入国後その勲功を賞し大いに拔擢した。

一豊の土佐における治政は永くなかった。少助は二代藩主の忠義に仕えた。この忠義は豪放磊落の豪傑でなかなか重臣どもの手におえる殿様ではなかった。しかし幼少の頃より苦勞を重ね、しかも思慮深く人物の練れている少助は巧みな手綱さばきで諫言し、忠義はそれを素直に聞き入れ、その軌道修正は常によろしきを得た。少助が忠義から仕置

役（参政）を命ぜられた折、一年間の猶子を願ひ国中の山林を九か月かけて実地踏査し、また二か月かけて浦々の港湾、船舶の状態を調査した。そして「藩内の山林には八尺廻りの良材が凡そ二百五十万本あり、これを年々五万本ずつ伐採すれば五十年間支えられる。五十年経てばまた八尺廻りに成長する樹が二百五十万本あり、これも五十年伐採できる。伐採の跡へ同数の植林を行えば五万本は永久に藩の財源として枯渴しない。またこれを搬出する船は云々」と細かく数字を挙げて藩主に報告した。^① 忠義はその卓見を賞賛し少助を仕置役に任命した。当時土佐藩の財政は多大の負債を抱え破綻をきたしていた。少助は土佐が山国で木材搬出だけが財源になることに目を付け、これによって後日負債を返済したのみならずなお余剰を生じさせた。任官に先立って一年も猶子を願つて国中を跋涉し克明に己の仕事の計画を立ててから就任するなどという役人があつた話など何処の世界にも類を見ないのではないか。幼い野中兼山の人物を見抜き奉行野中直繼の養子にしたのもこの少助であつた。少助は三十余年藩主の側に仕え、中老職にあつたが、ようやく許されて隠居し、身一つで多年の念願である百姓の生活をするようになった時、その身边には何ら富貴の影も無かつたという。藩主からも慕われ、また峻烈剛直一途の家老職の野中益繼（兼山の祖父）直繼（兼山の養父）、および兼山三代の傍にあつて常に寛容をもつて脇役としてよくこれを補佐し長短相補ひ、また一藩の衆望厚く、土佐藩政史上稀に見る政治家であつた。隠居生活に入つてほどなく忠義が京で病に倒れたと聞くと、京へ駆け付け神社仏閣に祈願して廻っているうち自分も病を得た。承應二年七十二才で京を終焉の地とした。

三省は父と並んで同じ仕置役を勤めたが、父子ともに学殖、経済共に長じおおいに藩政に貢献した。この親にしてこの子あり。三省もまた物欲の無い人物で、父少助の後姿を師とし高潔な人生を歩んだ。そのひとつとなりについては篤孝純至。愉婉之姿。若奉盈玉。居易行坦。未曾僥倖。自虚喜取衆善。人亦懽陳謀慮。故庶事就其凝。^②

とあり、温厚篤実で名聞を好まず功を他に譲るといふ「陰の人」に徹し、正反対の性格の兼山を終始援けた。ややもすると峻厳すぎる南学々徒の傾向とは趣を異にする度量の大きい円満なタイプの人物であった。

三省は政治に参与するにあたっては勤儉を旨とし慈悲の心をもって民治を行い、己に薄く他を厚くということを目指した。そしてその心情を

我性於聲色臭味之欲自淺。敢乏役乎心。其為政嚴而愛利。以綏斯氓為己任。⁽³⁾

と身辺の人々に常に語っていた。また三省は常に己の戒めとして次の語録を扇面に書き座右の銘とした。⁽⁴⁾

その劈頭に「夫事其親者。不擇地而安之孝至也。夫事其君者。不擇事而安之忠盛也。」という莊子の名句を掲げ、彼の純忠至孝の面目を表明している。次に「韓子曰、吾老自讀書。餘事不掛眼、實獲我心焉。」と学者としての志を韓子の語を借りて記している。仕置役として彼が最も意を用いた治罪について、「治獄有四要、公慈明剛、公則不偏、慈則不刻、明則能照、剛則能斷。」という「公慈明剛」を第三条において過酷な断罪に陥ることのないように配慮したので、後世まで仁愛政治家として名声が残っている。しかし慈に流れすぎて法を乱すことのないように第四条に「為治之要。寧過干剛。不可過干柔。顔子克己之功。非至剛則不能」と自らをよく戒めている。⁽⁵⁾

二十二才の兼山が奉行に任ぜられた時三省は藩主の扈從を勤めており、父少助と同じ仕置役になったのは四十五才の時で、それから僅か七年で病死したので、その父に比して政治上の業績は及ばないが、彼には父を凌ぐ学問上の功績がある。

三省は学を好み小學、四書、近思錄、五經、易、通書、啓蒙、三傳、三史、通鑑綱目、大學衍義、十七史等を究め程、朱、張、邵の書をも読破した。そして政務の暇を作つては講筵を開いて教えた。そして常に弟子達に

「學其可知也。可行也。涵養須用主一。窮理以讀書為要。讀書在乎氣而商量。莫迂濶。莫奇異。看來看去。歸着至當之義而已。」

と教導し、三省みずから知行共に重んじ門弟涵養のよりどころとして主一を説き窮理をすすめた。^⑥

弟子への教導の方法として「嘗聞昔者三省先生・兼山先生。俾學者看四書。率以一二葉三四葉為限。通讀元文集註。五七十遍至成誦不殆。而後方看文義。凡看文義。先以註解貼經語。又以經旨總註意。所謂反覆平句讀。沈潛乎訓義也。古人氣象泊其心難見。規模文理。又難見。所謂看道理難。要寬著心。又要緊著心。不寬。不足以見其規模之大。不緊。不足以見其文理之密。汲々焉而母欲速也。循々焉而母敢惰也。循序而漸進。熟讀而精思。母身質言語。迎取古人心。此為之得也。」^⑦とあるから同じ箇所を数十回反復學習させその後本文と注解を対照させて相互の趣旨を理解させる。このようにして古人の精神と文章の規模の大きさを悟らせるように努力させた。學習方法としては先ず師が読み講ずるのが一般のならいであつたが、弟子に考えさせて講じさせる方法をとリこれが南学の特色の一つとなつた。三省は小学・近思錄は四書・五經の階梯であるとしてよく精通させるようにした。また論語課會の説を筆録して板に刻り弟子の勉強に供した。さらに小学・太極圖も上梓し学界に寄与するところも大であつた。

先哲叢談後編卷之一に「平生以實踐體自得性命之源。固不欲誇耀勝人。懋啓導後進。實為南州理學之巨擘乎。」とあり南学者中の君子人として彼を讃えている。

また林羅山は彼を

「四裔之濱。匪王氣被。而有此等人物。有此等文章。豪傑俊乂。何代乏焉。蒿岳之神。奎星之靈。鍾降於海之南乎」と賞賛した。^⑧

このように三省はその父と共に他の鑑になる人物であり、藩政を行うにあたって峻厳に過ぎややもすれば徳に欠けがちな兼山に

「嘗諫兼山曰。公強欲知人而好用明。厥照非自然恐反入過察。夫明者順理先覺之謂。猶堯知丹朱之嚚訟是也。察者逆詐億不信之謂。猶德疑察却為奸佞被罔是也。用意公私辨事緩急相去何啻千里。兢兢業業須慎事於始。毋貽悔於後」^⑨と苦言を呈し戒めた言葉が残っている。こうした三省の支えによって大過を免れていた兼山であったが、三省の死後その本性があらわに出て悲運の最後を迎える結果となった。

土佐藩にとっても兼山にとっても得難い三省であったが、承應三年三月父少助の死に遇い哀惜の情著しく飲食も口に入らぬ状態が続き、ついに病を發し、同年七月父の後を追って五十一才で没したことは南学史に惜しんで余りあることであつた。

山崎闇齋は三省の死を悼んでその祭文に次のように記している。

「惟承應三年甲午七月十九日。洛陽山崎柯聞友人小倉三省丈之訃。海南百里。以親喪而不能為奔。以家貧而不能遣人。依便次奉香燭奠于吾友之靈前。乃哭曰。嗚呼。三省好儒惡佛。事君不容悅。事親不苟從。善撫弟妹。善惠隸僕。茲歲四月。遭父喪。哀毀致疾。今月十五日。永逝。痛哉。痛哉。不圖三省而遽至此也。交通之情。同志之樂。已矣。已矣。哀哉。哀哉。」^⑩

(3) 野中兼山

兼山は慶長二十年（一六一五）の生まれで字を良繼、号を兼山とも高山ともいう。通称傳右衛門、主計、伯耆など

といった。父は良明といい良明の母は初代藩主一豊の妹合（ごう）でその縁で良明は奉行職になっていた。一豊には実子がなく、土佐藩主になった五十七才になっても跡継ぎが決っておらず年令的にもそれを決定する必要にせまられた。一豊の弟の子である十才の忠義をとるか、妹合の子二十九才の良明をとるかその選択に迷った。その時期には良明の父は没していたので派閥の強固な忠義の方に軍配があがった。良明は一豊死去の後自分に対する土佐藩の処遇に不満で土佐を去り、妻の実家のある池田藩へ行った。藩主は祿を与えようとしたがそれを断って京都へ出た。その間妻を失い秋田万と再婚した。良明は浪々の身でありながら氣位高く暮らそうとするので万は苦しい生活をいられたが、兼山が四才の時父は京都で亡くなった。氣丈な母は女手一つで兼山を育て、やがて万は土佐へ下り夫の従兄弟である野中直繼の屋敷へ母子共身を寄せた。この時兼山は十三才であった。ここには亡夫の母である合も健在であった。兼山の祖父は合の最初の夫であったが早く死し合はその弟に嫁し直繼を生んだ。直繼は藩主忠義の従兄弟にあたり一豊以来の重臣で奉行職にあった。広大なその屋敷が城内にあったことをみてもその権勢を察することができる。一浪人の子に身を落としていた兼山もこれより藩中最も高級な武士の家庭の厳格な家風のなかでひたすら文武の道を歩むこととなり、そののち直繼の養子となった。

寛永八年（一六三一）十七才で奉行職になり、二十二才で養父の死に遇いその跡を継いで首席奉行職（藩の総理大臣にあたる）となった。老臣、重臣あまたいならぶ中で弱冠二十二才の首席奉行職は小倉少助の強烈な推挙によるものであった。これより兼山の眼前には眩しいばかりの前途が約束され、以来藩政を任されて三十余年、一氣呵成にその信ずる所を具現し万人の及ばない業績を残すこととなった。しかしそれゆえにその陰に世にも悲惨な一家の末路が潜んでいるとは神ならぬ身の知るよしもなかった。土佐藩政史上兼山ほどに偉業をなした人物はなくその権勢は藩

主に次ぐもので、泣く子も黙る兼山といわれたが、その明暗を分けた運命においても土佐史上この人ほど強烈な跡を止めた人物もない。

イ 兼山と文教

当時の武士達は概して禅学を修めていた。『野中遺事略』に「御若年の時分禅学を成され、活則をぬけ給ひ、中々御器用なりと承る。良明公常に禅を好給ふに依つて、跡を慕ひ思召して、禅に入せ給ふと仰せられしことなり。」とあるが、兼山も若い頃は父と同じように禅に励んでいた。兼山が儒学に移行したのは全く偶然の機会からであった。

兼山が奉行に就任した二十二才の時藩主の扈從として江戸に赴いていた小倉三省に禅の書を依頼したことからは始まる。

「爰許にて禅学をすれども句草紙といふ書なく禅の話則を悟らず便に其許にて句草紙を求め下し給はれと頼みやらるる小倉氏返答に仰の如く我等も只今まで禅学にて打過しが爰元にて風聞するは儒学とて面白きものある由中庸といふ書を求め此比ろ最中見申候中々禅学より面白く候聞求め下し候とて中庸章句一冊差し越され是れ万々年朱子の道の開くへき緒なり是より野中氏心を用ひて此書を見られ禅の心薄くなり其後大學論語の類段々に下り叡山に物読せし谷三助か父時中と云ひしもの達者に読て是等の書を講じ候よし」というような経緯で兼山は初めて儒学に首を突っ込んだ。

無論三省も江戸において初めて儒学なるものに接したのである。彼らはこの儒書によってその實際的論旨に心を揺さぶられ遙かに仏書より有益なことを知ったが、初めて接する儒学のこと故その悉くを理解するところまでには達することが出来ない。初めは兼山、三省ら好学の徒も何の手引書もなく全くの暗中の模索で苦心惨憺たる状態であつたようである。¹³ そのうち谷時中の存在を知るところとなり時中を迎え師とした。こうして兼山、三省は無論のこと吸江寺

の絶藏主（山崎闇齋）長沢潜軒、町定静、石川次右衛門、安積彦助、同次郎作、衣斐角助、渡辺武平、青木弥三衛門、馬淵弥助、山崎半兵衛らが学者として育つてゆくことになった。土佐の北部に本山というところがありここは兼山の知行地であるがこの地に学徒たちの合宿所を作り、兼山は国政の激務の間隙を縫つて本山に行きこれらの同士を集め、一切の費用は兼山が負い自らも共に勉学に励んだ。勿論城下の屋敷にも集合して研鑽に余念がなかった。これにより今まで僅かに三叟によって脈絡を繋いできた朱子学は一藩要路の大官の絶大な権勢と熱意によつてその庇護の下で海南朱子学―南学として最盛期に入ることとなった。

兼山は当初、「其比御国中に儒学はなく只寺々の坊主のミ佛学を知るのミにて小学、四書、五經の事をする者なし些文学讀などをバ知る出家も有り良繼君獨御思案有て四書内の大学を見給ひ此の大的字有るハ定めて大なる義にて知り被成がたき事なるべし中庸ハ中の字あれハ大学よりハ御知りなされ安かるへしと思召給ふ（中略）朱子ののたもふに小学より大学に入るとあれハ小学と云書有へし此書を御覽し給ハねハ学問の次第分明ならずと真乗寺に問給ふ真乗寺申すハ其小学という書上方に有といへともそれハ子供の説ものにて何の用に立ものニてもなき由申す良繼君思召ハ兎角小学より入らねバ学問ニハならさらんをかしき事を申しつる者哉と仰せ語り給ふ¹⁵」とあるように小学の存在を知りそれに興味を抱いた。そこで「扱京都へ被仰遣けれバ小学集説点付の保本有之とて下るを見れば愈思召るる所に叶ひ御大慶不斜小学の書と云ものならバ如何程如何様の本なりとも御求被成度由被仰遣けれバ高麗本の小学集説唐本の小学句読、同合璧、同分解、同詳解、同大全と異本とも御求させ給ひ小学より大学に入る所の道を能ざとり給ひ次第々々ニ御学問進ミ深淵の所ニ入給ふ¹⁶」とあり上方より句読本を集め、いよいよ小学の実践的価値を認め、これを階梯として四書、近思録を研修討論しあつた。兼山は学習の中で殊に小学に力点を置いたが彼独特の見解を持っていた

ことは「嘗聞海南先儒。讀四書尊集註。確乎固定。到小學解。便所頼屢換。規遵程愈集說。中葉據句。或校詳解集成。或料大全合壁拂鏡塵之類。三省先生為評定。用陳克菴句讀。兼山先生只用本註。為句讀間有不是處也」¹⁶と述べられていることと判る。兼山は単なる儒学者だけにとどまらず学を進めるにつれ朱子学の名分論に啓発されるところが大きく、その見識をもって『通鑑綱目』の講義した時は聴く者に深い感銘を与えたという¹⁷。兼山の保護を受けて勉学に勤しんだ同学の士は「学文仕られる衆」と呼ばれ、兼山は珍しい書を国内外より求めて京都あるいは国元で板木におこし土佐紙を使って出版して彼ら「学文仕られる衆」に与えた。まず小學句讀より始めて小學本註、李氏自省録、小學素本、四書、玉山講義、仁說、刑經、夙夜箴、敬齋箴などで、後世これを野中本という。

兼山の学問は生涯を通じて成長していったが益々奥義を究めるべくその権勢と財力を傾けて書籍を収拾した。城下の豪商櫃屋道清が藩用で長崎へ出るのに依頼して、朱子語類、朱子文集を求め、さらに支那に書を送って朱子學的、朱子書節要、儀禮、經傳通解、十三經、通鑑綱目、文獻通考、二十一史、三才圖繪、朱子大全を、また朝鮮貿易に携わる対馬の宗氏を介して朝鮮版の朱子語類、朱子文集、李退溪の自省録などを得、兼山の書庫は当時珍しい多数の書籍が藏され一々書名を記す暇がないといわれていた。兼山はこれらの書籍をひとり蔵することをせず、同学の士の研究に供し無論自らも研鑽に励んだ。後年山崎闇齋をして「諸国の士人、書を讀むこと土佐の野中良繼・會津の友松氏興に若くはなし」¹⁸と激賞させたほどである。そののみか「毎政事間暇。招書生而講習小學四書近思錄。讀五經。既迄春秋。喜看通鑑綱目。見解瑩徹。說得精神。聴者心了如響」¹⁹とあり兼山は繁忙の中を学徒を集めて小學、四書、近思錄などを講ずるばかりか五經、春秋、通鑑綱目も熟読した。兼山の志した学問は為政者としての施政の理想と方法を彼に提示してくれるものであった。南学遺訓に「兼山先生嘗舉鉢用一源頭微無間之語」²⁰とあり兼山は常に鉢用

一源顯微無間という語を愛用しており、その注釈に「理為舛。象為用。而理中有象。是一源也。（中略）象為顯。理為微。象中有理。是無間也。」²⁰とあり、学理と応用つまり理論と實際（学問と事業）の源は一つであるという考えで、これは兼山の師である時中の学行不二知行一如の学風と同じである。兼山の学問の見識は机上の理論的精緻さを玩ぶのではなく、またその事業は単なる仕事師や技術師のわざではなかった。彼の目的は領民の経世安民にあり、徳教と殖産興業を眼目とする学問の応用にあった。多忙な兼山には著作は残されていないが、兼山の唯一の作と伝えられる『室戸港記』に兼山の見識や学識を窺うことができる。土佐は激浪の太平洋に臨み、かつそれを避け得る大きな良港がなく難渋していた。室戸岬近辺は岩礁地帯であり風波が荒く、火薬もまだ土木工事には使用されておらず鑿や金槌もつこという甚だ原始的な道具のみで荒海を堰き止め港内を深く広くするのであるから今まで誰も手を染める事が出来なかった。兼山は室戸港開鑿をなし遂げた時これを藩主忠義の頌徳表として『室戸港記』の碑を建立したものである。その冒頭に「坎者地中容天氣之象、而天一之謂也、天運不窮、包絡天地之間、無物不存、人不能一日因之不生、而或嬰害、昔者聖人取象於卦澳以來、茫焉際天地、則船之浩然赴壑、則梁之隨其宜不嬰其害矣」とあり更にその先には「昔人有言、天地雷電草木、人不能為之、人之陶冶舟車、天地亦不能為之、於是見人事之功用、有可以補助他工之不及者」とある。これは自然の秩序のありようを述べこれに対し人間は自然に随順するものとしての位置づけをしている。人間は元々自然の秩序に従うべきであるがしかし人間には別の力があり（例えば船や橋など造ることなど）自然の力で出来ないことを補うのが人間の在り方で自然と人の力とが補足し調整しあうて行くべきであるという考え方である。儒学は人間主義であり兼山が現世隠遁の仏教から儒学遵奉者へと移行した所以もこれにあったかもしれない。この人間肯定の思想が自然の秩序の偉大さを認めながら人間の力も肯定し両者を調和させ得ると考えたようである。

これが兼山が次々と開発を手がけた理論的根拠であった。またこれは兼山の掌中にある武士支配の社会的秩序も当然のこととして自然の秩序と調和するものと考え、士農工商の社会構造を揺るぎないものとするため南学の奨励に力をいれた。²¹

儒学本来の目的は修身齊家治国平天下にある。兼山は初め小学を朱子学入門の書として捉えた。この書の道德礼儀の教えを藩内に限なく実施して日常生活の規範を示し封建社会の秩序維持を保とうとした。そのため機会あるごとに彼自身率先して普及に勤めた。まず小学にみえる孝に力をいれ、家にあつては母万に孝養を尽くした。その母が慶安四年に死亡すると知行地である本山に広大な墓所を築き（ここを帰全山と名付けた）儒葬の文公家礼に従つて盛大な葬儀を営んだ。このことが兼山はキリシタンであるという風説を生み兼山は急遽江戸にいつて釈明をしなければならぬ一幕もあつたほどである。またその教えに従つて彼は三年の喪に服している。母の死の前年土佐に古くからある習慣として行われていた火葬を禁じた。儒者は孝の立場から火葬をいみきらう。兼山は母の死に際し山崎闇斎に委嘱して『秋田氏墓表』と『帰全山記』を作らせ今に伝わっている。その『帰全山記』の中に「孝子敬其身。不敢毀傷。

行父母遺體也。以父母之身。火之。林之。人心所不忍聞。而為之。實虎狼之不如也」とあつて茶毘に付すというのは虎狼のしわざだと罵っている。しかし仲々改まらない火葬の廃止のため「罪人は火葬にすべし」という命令を出し、それによつてこの習慣はやつと改められた。また家族のなかから出た天然痘の患者を仮小屋に遺棄する習慣があつたのを不道德として厳しく戒め、博打や飲酒に耽る者には父母の養いを省みざる者としてその不孝を責めた。兼山は掟を度々出して儒教道德を領民政策に押しつけているようにも思えるが兼山の意図するところが窺える。しかし寛文元年の掟に

百姓の子供男女共に八九歳にも成り候はば面々の事を仕習はせ申すべく候。惣べて今迄は庄屋或は手前富貴なるものは子供に物を書かせ算用をも為し仕り候へ共、貧しきものは存寄もこれなきと相見ゆ。貴賤万民共に貧富はこれ有り候へ共人々の心ざしにより如何やうの芸能をも調ふる者に候まゝ、随分物を書き算用仕習候へと御申附けこれあるべく候云々能きもの出来候はば一かど取立て申すべく候²²

とあり特権階級専用の学問を一般庶民に広げ文化の向上を奨励した。まさに卓越した経綸である。このように兼山はその施政の初期の頃より儒学を奨励しその努力によって南学はその頂点を究めた時期に達したが、このことは土佐の学問思想界にとっての歴史的意義は甚だ大きい。また山崎闇斎を世に出した功績は、わが国にとって計りしれない価値を有するものである。さらに完全主義者の兼山がその情熱と資力を傾けて朱子の書物を収集し出版したことは文教における偉業であつた。

ロ 郷士の起用と殖産

土佐藩は初代一豊が遠州掛川六万石から土佐二十四万石を与えられ入国した。これが他大名のように国替えならば既に藩としての組織が出来あがっているが、四倍加増の藩体裁を整えるためには多大の出費を必要とした。その急場を上方の豪商からの借金で賄った。その後も公課、木材や石材などの献上、数度の出兵など幕府からの外様大名への風当たりは殊に過酷であつた。くわえて新しい土地での城普請もあり、遂に藩の財政は破綻をきたしたが、兼山の養父直繼や小倉少助などの努力によつて漸く息をふきかえた。何とかして藩庫を富ます必要に迫られていた。こういう時代に兼山は藩政を委ねられたのである。

土佐は北に峨々たる山脈が屏風のように連なつて海に迫つて平野が少なく、山岳を源として流れ出る河は狭い平野を突つ走つてすぐ太平洋に落ちる。加えて毎年のように台風に襲われこれらの河は暴れ河に變じ、田畑や民家が被害を受ける。兼山はこれらの河の治水工事、灌漑に自ら陣頭に立つて指揮を行つた。その努力の賜物である網の目のような用水や堰のお蔭で、その後は旱魃にも殆ど水の不足を知らず農業が行えるようになった。こうした兼山の用水は至る所にあるが、一例をとれば東部に物部川がある。この川の左右の台地は川沿いの平より三、五メートル高いため有史以来何人の手も拒み広い台地が荒地のまま放置されていた。兼山はこの最悪の条件に挑戦して上流と下流に堰を設け、この台地に用水を揚げ、二千町歩（二千ヘクタール）という水田を作り今日米の二期作地帯として豊かな稔りをめぐんでいる。また西部には仁淀川があるが、これは地形が複雑なうへ高低差が大であつて、岩山にはばまれて干害を受けやすく、せいぜい畑地くらいにしかならなかつた。この川は物部川より更に大きいので、その工事は一段と困難を極めたが、測量機械とてない頃のこと夜中に八キロメートルにわたつて提灯を連ね土地の高低を計つたと伝えられている。こうして千五百町歩（千五百ヘクタール）に用水を巡らし、現在土佐における園芸の中心地として成果を挙げている。この二つの河は城下町を離れて南北に平行して流れているので灌漑には役立つようになったが互いの連絡はない。四国山地の麓の村々からは木材、紙、蜂蜜、漆、茶、薪、竹材、楮、大豆など藩の重要な物産が生産せられるが、これらは人馬の背で運ばれていたので能率が挙がらなかつた。河を下つたとしても外海に出るより他なく出れば船も変えねばならなかつた。兼山は二つの河からの用水を浦戸湾へひき城下との連絡を取れるようにした。これによつて山地と海岸地帯との交流が水運に依つて円滑に運べるようになった。こうして内陸水路の完備によつて運河沿いに町作りを許し保護の手をのびした。商人、手工業者を集めて繁榮しはじめた町にはそれぞれ新しい文化も

生まれた。さらに施政の末期近くには河川の工事は更に四万十川、宿毛の松田川まで及び灌漑面積は三八七二町歩となった。こうして荒地地で放置されていたものが緑の肥野と化したのである。

他方海運施策としては、敏速な海上輸送の必要性に迫られた時代であった。先に小倉三省を総指揮者として手結港が作られてはいたが、土佐には良港がなく荒浪の外洋をひかえて多数の船舶の退避できる港がなかった。上方へ回る際には風波の荒い室戸岬で海難事故が跡を絶たなかった。港ほしさにこれに挑んだ人もあったが岩礁の林立する岬近辺の工事には齒がたたずこれが海国土佐の宿命的泣きどころであった。人夫達の道具は槌と鑿、もっこだけの原始的なもので、人海戦術で自然の猛威に立ち向い、荒海を遮断して港内を深く広く掘るといふ悪条件を克服し漸く完成にこぎつけた。兼山はこの他浦戸港、柏島港も成功させ上方や中国、九州への運航が容易になった。兼山の治水、開鑿工事は耕地面積が少なく米年貢の不足に悩む藩の財政基盤の強化ともなり、また走り者（生活出来なくて他国へ逃亡する者）の減少に役立った。港湾の整備は土佐海運への福音で兼山の大きな功績の一つである。

いま一つの偉大な功業に郷士の起用がある。兼山施政の初期には、山内藩の直臣の数は多くなかったが、島原の乱への出兵や外国船渡来の警備のために兵力を必要としていた。長宗我部氏末期には約一万近くの一領具足がいて、山内氏入国の際には敵地に入るような緊迫した状態であった。以来弾圧と懐柔の繰り返しで、多数の面従腹背の一領具足らが山野に潜んでいることは藩にとって不気味な存在であった。兼山はこの勢力に目をつけた。彼らを藩の機構の中に組み入れ反抗心を拭い兵力とするため度々郷士の起用を行った。身元調査と人品改めを行い、新しい土地三町歩を開墾させて士格を与えた。数度の起用によって兼山末期には郷士の数は約千人に達し山内氏直臣の数を上回ったという。これにより一領具足は藩の下士となり、それ故侍としての誇りが保たれたので、藩に対する反抗心は無くなっ

た。領内に網の目のように用水を作るまでは藩の仕事であつたがその先は勞せずして郷士達によつて次々と荒地から新田が生まれていったのである。郷士は新田開発と藩の軍事力に大いに力となつたがこれが後に兼山の命取りの一因ともなっている。郷士達の中には優秀な人物が何人かおり兼山はこれらの人々を役人に取り立て実務を行わせ兼山の手足となつて数々の難事業を助けた。土佐最東部にある沖の島と山岳部に篠山という所があるが、この二ヶ所の境界問題で隣藩宇和島藩との争いとなり、双方とも幕府へ持ち込み激しく争つた。兼山は長宗我部地檢帳をもとに有利に戦う戦術を採つて度々江戸に赴いたが、この時も大いに力を發揮したのがこの郷士出身者であつた。それは彼等が村方における実情を良く把握しており体験に裏打ちされた見識を有しているからで、世襲制度にあぐらをかいて城下にあんのんに暮らして居る家臣には到底なし得ない仕事であつた。しかし兼山政治を誹謗する無能の輩達は兼山がこれらの郷士を重用して彼らと直接諸政策を進行してゆくことを不満と不平の目で見ていた。また藩主忠義の夫人の里方である松山藩の前藩主松平定行は兼山の郷士起用を最も危険視していた。その背後には幕府の目があつた。松山藩は土佐藩のお目つけ役でもあつたので兼山失脚の影はここにもあつた。数ある郷士の中には兼山の威をカサに着て命令を盾に実情を無視して過酷な所業に走る者もあり、これが兼山政治の命取りとなつたとも言われている。兼山はまた産業の奨励にも熱意をいれ林業、製紙、水産の奨励は勿論楮、漆、茶、桑等の商品作物の育成栽培にも努力した。砂糖のない時代であつたので他国に蜜蜂を求め飼育させた。川に魚が少なかったので鯉の稚魚を鯰と共に求め放流したり、土佐にはいなかった蛤を買い求めて帰るとの報に浜辺で蛤なるものを一目見ようと待ち受ける人々の目の前で沖の海中に沈めてしまったという話もある。この他捕鯨業や陶業、絹織業などあらゆる産業の奨励に努めた。

しかし兼山の相次ぐ事業は使役による農民への皺寄せもあつたが一方藩の財政を著しく疲弊させた。兼山は藩庫の

収入を増すため各種の商品を直接藩の専売とする方法を敷いた。これは一部の者を除いて多数の商人の破綻をもたらした大きな不平を生んだ。ここにも反兼山の付け入る隙間が出来た。

今日土佐を旅すれば到るところに兼山の事績を見、兼山に纏わる話を耳にする。高知の中央部香長平野に立てば水の枯渴を知らない沃野の連なりに兼山の遺徳を偲ばざるを得ない。誰が彼を誹謗することができよう。兼山の施政三十余年を顧みれば土佐七郡の山河に不朽の大事業としてその跡を止めている。彼は国家百年の大計を僅かの年月で完成した。土佐藩では彼の先にも後にも彼を凌ぐ人物は誰一人として出ていない。しかし惜しむべきは、彼の性格からくるものか否かは別として彼は余りに性急に事を運び過ぎた。そのため使役にかりだされる農民は過酷なまでの労役に疲労してその怨嗟の呻きは陰にこもって国中に満ち満ちた。また兼山政治の末期に行つた藩の専売制により商人は生活困難となり大きな怨みがふくれあがつた。かねて兼山を快く思っていなかった重臣達は好機きたれりと兼山失脚の陰謀の仕上げにかかった。この時兼山とは長年肝胆相照らす仲の忠義は中風で倒れて往年の面影は失われ、隠居してただの老人となっていた。三代目の豊昌は忠義に比して器が小さくその側近も揃って小物ざろいでこれら全て兼山を快く思っていなかった。藩のお目つけ役の松山藩の松平定行はかねて兼山の手腕を恐れていた。幕閣においても兼山の富国強兵策、国境争いにみせた兼山の敏腕には忌諱の念を抱いていた。儒学によって封建制度の護持を計つた兼山は、家中に君主に絶対服従の封建道徳を要求してきた。今その梓に自らを沈める運命が訪れたのである。彼は何の反抗も試みず速やかに栄光の席を滑り下りた。寛文三年七月通算三十三年に亘る兼山施政の幕は下りた。彼は城下を離れた寓居に家族も伴わず逼塞し、その年の十二月半ば持病の喘息で血を吐きながら急逝した。四十九歳。兼山を惜しむ人々から見れば彼の悲惨な結末は無念な思いにかられる。小倉父子が在世していれば彼の猪突盲進もなかったか

も知れないと想像される。しかし兼山には兼山の信念があつた。『室戸港記』に「賢君之所以勞其民。所以逸其民。皆得其道也」⁽²³⁾と記しているが彼は今は辛くとも苦勞すれば必ず後は報われるということを信じていたからこそ強行した。これだけの事を僅かな時日で実現するのだから犠牲や歪みが出るのはやむを得ないことである。兼山の死後その遺骸は城内の自宅にも入れてもらえず侘しい葬儀であつた。⁽²⁴⁾

ハ 兼山の遺族

兼山には四男三女があつたが家族全部土佐の東端の宿毛へ流された。山あいの家は竹矢来で囲まれ常に警備の監視のもとに囚人として暮らさねばならなかつた。この家族は婚姻も禁じられ、この悲惨懊悩の苦境に狂死自殺の兄弟も出、全て男系が絶えて初めて赦免状が出た。それまでに実に四十年の歳月が流れていた。これほど残酷非道な方法があろうか。正に土佐史の汚点と言わざるを得ない。生き残つた娘三人は赦免されたがその中の一人婉はやつと宿毛を離れ城下東の朝倉へ移り住んだ。婉は四才から幽閉され人生の大半を竹矢来の中で送つたが、殊更氣丈で学問の造詣深く、四書五經に通じ徒然草、源氏物語その他の和書も読破し文も確かであつた。婦道を述べた『朧夜の月』や和歌、漢詩数編が残っている。また医術の心得もあり野中家々伝の薬も作つた。家中の者を診る時は障子の陰から患者の手に糸をつけて脈をとつたといひこれを「お婉様の糸脈」という話として伝わっている。

彼女は六十五才で死ぬまで執政野中兼山の娘としての衿持を持ち続け貧しい生活にもかかわらず父を始め祖先の祭祀に務め野中家の面目を全うした。

(4) あとがき

兼山失脚の後の土佐藩は兼山三十余年の施政の悉くが破壊され彼の庇護の元に育成された多くの学者は焚書坑儒とまではゆかずとも皆追放の憂目に遇った。これを「寛文の学厄」「南学一空」という。しかしかえって他国へでた学者によって南学が広められその影響は計りしれないものがあつた。そのままでは土佐における文教は消失することになっていたが、天は一縷の糸をさづけてくれた。兼山死亡の年に生まれた谷秦山がやがて山崎闇齋の門にはいり闇齋学を再び土佐へ逆輸入した。秦山はその後洪川春海に学び、神道を本とし儒学、天文、曆法を左右の学とした独自の日本学の体系を樹立し貴重な足跡を残した。その子垣守、孫真潮も優れた学者で、それぞれ、儒学、国学、歌学に秀で、著書も多く、代々学者を出している。(秦山から五代目が明治十年西南戦争の際の熊本籠城の司令官谷干城である。)秦山の学統を谷門派とよび、その土佐の学界に及ぼした影響は顕著なもので土佐思想界の基盤となつた。秦山没後七十年に秦山を継ぐ偉大な篤学者が現れた。極貧のなかに一生を没し、生涯土佐を一步もでずして独学独習で『万葉集古義』百八十三巻を四十年かけて完成させた鹿持雅澄である。彼の死後二十年を経た明治十二年、天皇勅版として全巻が上梓された。雅澄の晩年は外国船の来航で尊皇攘夷の声のかまびすしい時代で、彼は憂国者として幕末志士に多大の影響を与えた。土佐勤皇党の領袖武市瑞山は雅澄の妻の甥である。雅澄の門下生からは武市瑞山をはじめ幕末勤皇志士が大勢出ている。

そもそも土佐に儒学の先鞭をつけたのは夢想国師であり儒学は寺院において法灯とともに持続された。その後南村梅軒によって五山派の儒学が戦国武士に流入され武士道の高揚に寄与した。その後再び僧院に逼塞したが、谷時中に

よって禅と訣別し儒門の確立を見るに到った。おりしも時中と兼山の結びつきがあり、兼山の南学への傾倒は拍車がかかり、彼の熱意と資力によって兼山の書庫はまさに儒学の宝庫となり、土佐における南学の最盛期を迎えることとなった。しかし兼山の悲劇によって「南学の一空」を迎え、累卵の危うきにあったが救世主として谷秦山の出現をみた。闇齋学を受けた秦山によって従来の南学に神道が加味され復古主義的な思想へと転換してきた。なお時代が下って鹿持雅澄という不滅の学者が現れ、さらに国学の色彩が濃厚となり当時の時流に唱和した尊皇攘夷の思想へと展開し、これが幕末の青年の魂を揺さぶった。それらの青年層は皮肉にも兼山が取り立てた郷土の子孫達であった。彼等は命を己の信ずるところに従って国のため投げ打ち、同士の屍を乗り越えついに維新の夜明けを招来させた。その歴史の陰には多くの女性の犠牲を伴った。彼女等はいつの間にかその家に滲みついた無言の教えに支えられ齒をくいしばって逆境に耐えた。それは男子のように勉学で得たものでなかったにせよ土佐の文教は人々の心底に滔々として流れ女性達はその思想を立派に受け継いでいた。

おわり

- (1) 中島建依別『土佐文化史傳』一四四―一四五頁。
- (2) 大高坂芝山『南學傳』上巻、七頁。
- (3) 前掲、七頁。
- (4) 中島前掲、一五六頁。
- (5) 前掲、一五六―一五七頁。
- (6) 大高坂前掲、九頁。
- (7) 南學遺訓・芝山存一書卷之四、一頁。

- (8) 大高坂前掲、九、一〇頁。
- (9) 信濃東条耕子蔵『先哲叢談』後編卷之一、九頁。
- (10) 寺石正路『南學史』三三二頁。
- (11) 皆山集4 歴史(3)篇、一六八頁。
- (12) 前掲、一六六頁。
- (13) 高知縣學務部『南學讀本』六四頁。
- (14) 皆山集4 一六八、一六九頁。
- (15) 前掲、一六九頁。
- (16) 前掲、南學遺訓、二、三頁。
- (17) 寺石前掲、二八二頁。
- (18) 小関豊吉『南學と土佐の教育』三二頁。
- (19) 大高坂前掲、一一頁。
- (20) 前掲、南學遺訓、六頁。
- (21) 横川末吉『野中兼山』五八頁。
- (22) 溝淵忠廣『南學と師道』三六頁。
- (23) 寺石前掲、二八六頁。
- (24) 平尾道雄『野中兼山と其の時代』一七三頁。